

第3回「日中未来創発ワークショップin北京～未来の都市生活を考える」 企画運営スタッフレポート

東京大学文学部
社会学専修3年
星野匠海

私たちは日本科学協会が主催する作文コンクール パンダ杯の受賞者に対して北京でワークショップを提供する目的で11/23-11/27の5日間訪中した。北京ではワークショップだけでなく、企業訪問や現地学生との意見交換会もあり、大変貴重な経験を得ることができた。今回が初めての訪中だった自分にとっては、街の様子や人とのコミュニケーションの全てが新鮮だった。現地の人との交流や社会に対する観察を中心に、以下に訪中時の経験を記す。

1. ワークショップについて

未来の生活の1シーンについて、技術の面を含めて想像するというテーマのもと、AI企業のセNSTタイム訪問、北京市街地でのフィールドワーク、ディスカッションが行われ、日中の若者により構成された6チームがそれぞれ提案を行った。過密なスケジュールの中、企業訪問やフィールドワークを通して得られた知見をまとめてひとつの提案をまとめるという作業は決して容易なことではない。しかし私が担当したチームのメンバーは国籍や言語の壁をいとも簡単に超えて、街で経験した不潔な公衆トイレと企業訪問で見学したAIカメラを組み合わせた効率的なトイレ清掃システムなど、素晴らしい提案をまとめていた。他のチームの発表も大変興味深く、ワークショップにご協力いただいた国観智库のご担当者をして「北京市長をこの場に呼ぶべきだ」と言わしめたように、パンダ杯の皆さんと中国学生の皆さんの観察力や発想力に恐れ入るばかりである。

2. 百度訪問と北京大学生との意見交換会について

また今回は、百度の本社に伺い今後のAI戦略に伺い、北京大生と一緒にディスカッションをするという貴重な機会も得た。

百度の市場におけるポジショニングは中国語や中国理解を最も理解したAI企業だと強調されていた。これに関して北京大生と会話した際に、西洋で開発された生成系AIは西洋の政治観に影響を受けており、中国政治について批判的な意見を述べる文章を生成しやすいと不満げに1人の学生が話していたのが次の2つの点印象的だった。すなわちAI開発にあたっては開発者によってバイアスが生じうる顕著な例だという点と、その北京大生が持つ政治観と日本国内での政治観との対照的なまでの相違である。日中の間には共通点もあれば大きな違いもある。AIという文脈にしてもそれ以外の文脈にしても、共通点に基礎を置いて交流を進め、違いを乗り越えていく不断の努力が重要であると切実に感じた。

3. 中国社会について

中国社会と日本社会の違いについても印象深い点が多々あった。

北京市内でまず目につくのは、ほぼ大通りの各交差点に配置されている公安の存在である。

私は慣れるまでその光景を見る度に緊張が走ったが、道いく人々は全く意に介さない様子だった。あるとき公安に道を尋ねる機会があったが、応対して頂いた方は大変丁寧に教えてくださり、人間味を感じた。北京の人にとって公安は身近な守護者、日本の交番に近い存在なのかもしれない。

また、多くの電動モーターバイク、電気自動車も北京の中心市街地を特徴づけるものだった。政府からの号令があって急速に普及するこのダイナミズムは中国ならではの感じるところがあった。しかし、電動モーターバイクについては音がせずにそれなりの速度を持って近づいてくるので危険を感じることもあった。

もう一点挙げれば、決済に関してである。モバイルオーダーとモバイル決済は近年日本でも一気に導入が進んできた。ただ日本のモバイルオーダーはブランドによってアプリが分かれていることが多いが、中国の場合、全て1つのアプリで完結する。私は事前にアリペイを登録して行ったが、シェアサイクルからバス、店でのオーダーから決済までほぼ全ての消費活動がアリペイアプリの中だけで完結した。さらに、大学内のキャンパス内では顔認証により決済が完了するシステムも見学した。非常に便利であるが、恐らく日中の間には情報やプライバシーに対するアプローチの違いがあり、すぐ日本でも同じサービスを展開させることも難しいのだろうとも感じた。また、モバイルオーダーよりも口頭で注文する方が効率が良いときもあるが、店舗によってはモバイルオーダーしか受け付けられないこともあり、全てをスマホだけで完結させてしまうことがベストだとも限らない。

総じて、北京はこれまで見知った社会の様子とは異なる様相を呈しており、非常に新鮮だった。

今回の訪中で、日中の若者の交流を促進する活動に関わらせていただき、大変光栄であるとともに、さまざまな学びを得ることもできた。

笹川平和財団をはじめ、国観智库、センスタイム、人民中国、中国人民大学、北京語言大学、北京大学、百度、ともに訪中した学生運営メンバー、その他この訪中の実現にご尽力くださった全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。